

「森銑三刈谷の会」だより 43(2025/6/21)

発行 2025/6/21 (月刊・メールでの投稿歓迎)

例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会

共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp

43:2025/5/17(土) 村瀬典章氏解説「森銑三生誕 130 年
没後 40 年展」参加 13 人

「森銑三生誕 130 年・没後 40 年記念展」の展示解説

村瀬 典章

森銑三は刈谷で生まれ、人物研究・書誌学者として名声を挙げた。そのきっかけとなったのは刈谷図書館の創立前に村上文庫を整理したことによる。郷土の偉人として顕彰するとともに、村上文庫及び刈谷図書館の紹介のため今回の展示を企画した。展示点数は 48 点。刈谷市歴史博物館より 3 点の資料を借用したほかはすべて本館所蔵の資料から展示を行った。

ここでは主な資料を紹介してみたい。まずは森銑三肖像写真、これは昭和 52 年に銑三が教え子たちに招かれて帰省した際、刈谷の写真館で撮影されたものである。普通の印画紙印刷ではなく、布地にプリントしてさらに筆で修正されたものを額装されたものである。これを見た三郎は違和感があると銑三に宛てた手紙に認めている。

村上文庫整理日誌は大正 5 年 6 月 17 日から記入されており、整理が始まった日にちがわかるが、銑三は 20 日から全面的に整理を任されている。それを裏付ける資料で亀城尋常高等小学校日誌には 20 日に学校に鍵を取りに行ったことが記載されている。

図書分類目録とある目録は、最初に印刷された村上文庫目録より前に作成されたものと思われる。皮の表紙の村上文庫台帳は、図書館が開館したあと、文庫の 1 冊 1 冊をゆっくりと内容を読み取りながら書き上げたものである。

「要求三件」とある資料は、図書館は最初の一週間は毎日開かれていたが、すぐに日曜日だけの開館に変わった。それを知った銑三は無給でいいから毎日開館してほしいと要望したものである。銑三の人柄がわかる資料である。

本館には銑三・三郎関係の手紙を多く所蔵しているが、そのうち三郎から銑三に宛てた手紙には、刈谷の様相を詳細に報告している。銑三は逐一書かれた刈谷

の様子をなつかしく思って読んでいたことだろう。これらの中から、昭和 34 年の伊勢湾台風の被害状況、正木新道の山車の様子、昭和 35 年と昭和 40 年の町名変更の様子や昭和 40 年の銀座 4 丁目での火事の様子によって、当時の刈谷の様子を垣間見ることができる。

図書館開館時の銑三を彷彿させる資料群に感動

神谷 磨利子

今回の展示の中には図書館開館時の銑三の働きに関する興味深い資料がたくさんあった。特に資料 26 の銑三が記した「新規購入本リスト」、31 の「新刊図書仮目録」は今回初めて目にする資料であり、面白かった。ここに書かれている図書は、1917/3/25~5/18 に銑三が上京して調査し購入した図書あるいは名古屋の本屋から購入した新刊書で、最初の『図書分類目録』巻末の「新刊書目録」とほぼ同じ内容だと解説があった。資料 32『熊沢蕃山』33『一休和尚伝』など今も図書館に所蔵されているという話からは、図書館開館時の銑三の姿が身近に感じられた。資料 34 の「図書館に関する一件」で銑三が提出した要求三件は、郷里で児童図書館を建てて館長になることを空想した(「読んだ本の追憶」『帝国民』1919/6)銑三の思いに繋がっていると感じた。

資料 38 終戦直後の食糧不足時代の手紙に「長野君を訪れてさつま芋でも買って貰って来ようと思ふ」とあるのは、本会第 41 回(2025/3/15)の森銑三の弘文荘時代の長野英夫(石井鶴三の高弟の画家)文章と合致する事柄であったのも発見であった。

書簡から垣間見えた暮らしぶり

神谷 美恵子

村瀬さんの真摯な話し振りに引き込まれて行きました。銑三さんと三郎さんとの書簡で当時の暮らし振りが垣間見られ、人の繋がりを大事にされていると感じました。又手紙や葉書は作者の手を離れると一人歩きをするのは俳句と同じですね。

メンバーの正木さんが子どもの頃見かけられた三郎さんの話も興味深かったです。大きな仕事をされた人達が身近に感じられました。

面白かった手紙の展示の方法

河橋 育実

村瀬さんの解説をお聞きしながら図書館の企画展を見ました。やはり解説していただくと良く分かります。その後の展示方法についての話も興味深かったです。

手紙等展示をするためプライバシーに配慮された苦労話や、メンバーの中には子どもの頃に三郎さんを知っている方もいて、思い出話しもあって面白くて楽しい会でした。

村瀬さんの解説は2回目でしたが、機会があればまたお聞きしたいです。

村瀬さん ありがとうございます。

資料集の中のお宝と手紙の良さ

神谷 明子

村瀬さんが淡々と話されていましたが、あの資料集1冊の中にどれ程の宝があるか？読み始めたら、どんどんはまりそうで少しこわいくらいですね。

今回の展示で、手紙のよさがわかりました。私も文通している方が1名います。何でもない日常を書いてやりとりしています。同じ地域に住んでいるから会える距離ですが、手紙の距離感とか、文字の姿から想像するのも楽しい。今後これをどう保存するのか迷います。今は封筒に付いた日にちを書いて箱に入れていますが読み返しもしほとんどしない。それでもポストを覗く楽しみをくれる手紙は有難い!!ボケ防止にもなるし!!

「森銑三生誕百三十年・没後四十年記念展」に寄せて

飯田 芳子

今回展示物の中で特に目を引いたのは、教え子尾崎銑三氏の纏めになるアルバムである。氏と同じ名前に

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

あこがれたのか、畏敬の念から生まれたものか、いずれにせよそこには師への思いがつつられていることは確かである。

図録が語るのは銑三の人生であり銑三にかかわる人々の声であり、それは正木町を中心とした記事として手紙という媒体を通して双方向から語り掛けている。江戸が好きな銑三が図書として選んだ新刊本が残されているのもうれしく、熊沢蕃山・一休和尚などよく保存されていたと思う。

ガラスケースの中の貴重品を見ながらその時代の香りに浸っていると、残された者たちの声が聞こえてくるようであった。村瀬氏の丁寧な展示説明は鑑賞者の耳目の理解を助けとても良い講座であった。

2025/6以降の予定

44：2025/6/21(土) 第1会議室：長瀧秀雄「服部長七と三河人」

45：2025/7/19(土) 視聴覚室：神谷磨利子「森銑三・森三郎往復書簡（昭和43年10月）」を読む

※ 8月は休会

46：2025/9/20(土) 第1会議室：鈴木哲「永井荷風「断腸亭日乗」で読む森銑三「偏奇館の或日」」

47：2025/10/18(土) 視聴覚室：森銑三(1934年)「黄表紙作家としての唐来三和」～『再会親子銭独楽』（寛政5年、出版つたや）を読もう(1)～

48：2025/11/15(土) 第1会議室：『再会親子銭独楽』（寛政5年、出版つたや）を読もう(2)

※ 12月は休会

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆